

「淡路島の歴史的な景観とその活用に向けて」

講師：淡路地方史研究会 会長 武田信一

日時：平成 23 年 12 月 17 日（土）14：00～16：00

場所：淡路県民局 洲本総合庁舎 中会議室

（１）景観とは

本題へ入る前に、淡路島景観づくりガイドを使って、景観についてお話したい。

ガイドでは、景観は5つの要素で構成されると定義している。その要素とは、海、山、川などの「自然的な景観」に始まり、史跡、社寺や歴史的な建造物などの「歴史的な景観」、人々の生活に伴い生まれた景観、伝統的な祭り、生業や産業にまつわる「文化的な景観」、最後に「開発や整備でつくられた都市的な景観」である。

淡路島には、これらの要素が複合した景観が広がっている。例えば、千光寺の鎌倉時代につくられた釣鐘に「先山は日本で最初にできた山である」と彫られ、そのように言い伝えられている。このことから、先山は自然的な景観であるだけでなく、歴史的な景観でもあると言える。また、洲本市には、五七日忌（35日目）に先山へ登り、山上から谷に向かって団子を投げる供養行事「団子ころがし」という慣習がある。更に、千光寺は、「巡礼の島」といわれるほど巡礼が盛んな淡路島の第1番霊場でもある。このように、先山の景観は様々な価値を有している。

景観は、目で見えるものだけと考えがちだが、必ずしもそうではない。景観には、耳で聞く音や鼻で嗅ぐ匂いも含まれる。例えば、祭り太鼓の音を聞きだんじりを見る、森で鳥の声を聞きながら花の匂いを嗅ぐなど、音や匂いも“地域の表情”である景観といえる。

私は、若いときに三原高校へ勤めていた。中山峠を越えて三原平野へ入ると、徐々に独特な匂いがしてくる。時期にもよるが、玉ネギの匂いをよく感じていた。三原平野は昔から玉ネギの産地である。玉ネギの収穫の時期になると、峠を越えただけで玉ネギの匂いがし、「三原へ来たのだなぁ。」と感じたものである。

景観は、私たちを取りまく環境の1つだと言っていいのではないかな。優れた環境で生活を送ると心が豊かに、安らかになる。そこに住んでいる人にとっては、「この美しい景観のなかで、これからは暮していきたい。」という気持ちになる。また、初めて訪れた場所が素晴らしい景観であれば、その景観に感動しもう一度行きたいという気持ちにもなる。景観は、地域の魅力であり、地域への愛着と誇りを育む。このことから、景観は1つの風土資産である。風土とは地域のことであり、資産とは財産である。景観も地域の財産と考えるべきではないか。

（２）淡路島の歴史と景観

1) 地理的特徴に育まれた豊かな歴史

淡路島は、個性豊かな歴史を育んできた。その要因の1つに、淡路島の立地が挙げられる。地図を見ると、日本のほぼ中央部に淡路島が位置し、古くから都が置かれた大和や京都に近いことがわかる。江戸時代には政治の中心が江戸に移るが、経済の中心であった「天下の台所」大阪にも隣接していた。このような立地条件により、淡路島とは盛んな交流が行われ、豊かな歴史を育むことができたのである。

淡路島は、古くから軍事面、交通面の要地であった。古代の日本の玄関口は九州であり、外

国の要人は、九州から瀬戸内海へ、大阪湾から難波に上陸した。その際、必ず明石海峡を通った。昔は、海上交通は最も便利な移動手段で、その役割は非常に重要であった。淡路島は島国であり、閉鎖的だと考える人もいるが、むしろ島国だからこそ多方面の地域と交流があった。そのため、大和政権は淡路島を軍事面においても重要な要所であると考え、敵対勢力が淡路島を支配し交通を遮断することを恐れた。

来年、古事記編纂 1300 年を迎える。そのため、「国生み神話」がクローズアップされている。「国生み神話」のルーツは、淡路島の海人の伝承である。淡路島の海岸沿いには、昔から海人が、漁、製塩や海運を生業に生活を営んでいた。その海人が語り伝えていた素朴な島生みの話が、「国生み神話」のルーツである。

大和政権は、軍事面と交通面の要所である淡路島を治めるため、まず、海人を支配下においた。海人を海軍として活用したとともに、天皇家の食料の確保も行った。更に、大和政権は島全体を支配するため、次の手を打った。まず第 1 手は、天皇が度々淡路島を訪れたということである。日本書紀では、来島の目的は狩猟であり、島内には獣や鳥があふれていたと 2 ヶ所に記されている。しかしながら、この記録は信用できない。というのも、鹿や猪は大和近辺にもいたはずであり、わざわざ淡路島にまで狩猟のみを目的に訪れたとは考えにくい。やはり、一番の目的は、淡路島を大和政権の支配下におくことであろう。第 2 手は、島内に御殿や直轄領をおいたことである。島内におかれた御殿である「淡路宮」にて、第 18 代天皇の反正天皇が生まれたとされている。淡路島の支配を進めていくなかで、重要な場所は天皇家直轄領の「屯倉」とした。日本書紀によると、日本で最初に直轄領がおかれたのは大和で、2 番目が淡路島である。古事記にも、仲哀天皇のときに淡路島に「屯家」をおいたと記されている。また、天皇家へ食材を提供する島である「御食国」であったことから、中央政権にとって淡路島は重要視されていたことが伺える。

このため、淡路島は中央政権の動きと関係が深い。一例を挙げると源平の合戦のときに、淡路島は重要な戦場となった。また、南北朝の動乱のとき、足利尊氏が後醍醐天皇に反逆し西へ逃れた際に、旧東浦町釜口へ舟を寄せたという話がある。明石海峡を渡るために潮待ちをしていたのだろうか、そのとき淡路島に見えた灯りを家来に探させると妙勝寺の灯りであることがわかり、尊氏は大変縁起が良いと喜んだとのことである。尊氏は妙勝寺に刀を奉納し、戦勝を祈ったとの言い伝えがある。このように、淡路島は中央で起こった出来事と関係する歴史が多く、それはやはり地理的な位置が影響しているといえる。

他地域との盛んな交流を通じて、島内で花開いた伝統芸能や文化もある。人形浄瑠璃は、まさにその顕著な例である。西宮の人形使いが淡路島へ移り住んだのが始まりといわれ、もとは祈禱の際に人形を使ったとのことであるが、その文化を継承し人形浄瑠璃という芸能にまで磨き上げた。

それだけに淡路島は歴史的な景観が豊かであろうと思いたいが、景観は時代とともに移り変わっていくものである。現在に残された、各時代に思いを馳せることができるわずかな歴史的な景観を望み、イメージを膨らませていくことが大切だと思っている。

2) 淡路島の景観の移り変わり

縄文～古墳時代

淡路島に人が住みだしたのは、約 2 万年前であるといわれている。諭鶴羽山山麓の浦壁周辺

にその遺跡が出土している。

その後、今から約1万年前の縄文時代になると、気候が大きく変動したようである。縄文時代前期は、温暖化により海面が上昇していたため、洲本平野は入り江になっていた。最も海面が上昇したときで、三洋電機の辺りまで海水が入っていたと推測されている。三原平野も同様に入り江であった。縄文時代中期から後期にかけて寒冷化が進み、海面が後退し、そこへ土砂が溜まり三角州ができた。洲本はその過程でできた陸地で、洲本の“洲”は三角州の“州”を意味する。

その後、約3千年前の弥生時代に入っていく。縄文時代と弥生時代の大きな違いは、水田稲作が始まったことである。稲作が始められたことで、景観も変わった。水田は、まず、湿地につくられる。そして、川の中流域から上流域へと広がっていく。人々は水田の側に家を構え、より効率的に稲作を続けるために共同作業を始める。例えば、水を引くための水路は協力してつくる。そして、集まって住むようになり集落ができる。集落、更には村ができると、村民を指図するリーダーが登場し、力をつけ、やがて地域の有力者となる。

有力者が亡くなると墓がつくられるが、その大きさは一般の人の墓とは比べものにならない。先山山麓の加茂小学校周辺では、発掘調査により当時の営みが確認された。現在、加茂小学校を訪れてもその面影をうかがうことはできない。しかしながら、柳学園へつながる坂を登り、門の右側で発掘された弥生時代の住居跡「下賀茂岡遺跡」から洲本川を望むと、低地に水田をつくり、山裾に住居を構えていた当時の生活を思い浮かべることができる。

弥生時代のもう1つの特徴は、青銅や鉄が使われるようになったことである。鉄製品というと北淡路で発見された五斗長垣内遺跡が有名である。この遺跡では、日本最大級の鍛冶工房跡(12棟)が発掘された。

淡路島では、様々な遺跡が発掘されたが、その多くは埋め戻されたり壊されたりしている。そんななか、幸いにも五斗長垣内遺跡は保存され、その一部は復元された。五斗長垣内遺跡は、標高200m、海から約3kmも離れた場所にある。なぜそのような不便な場所に鍛冶工房がつくられたのであろうか。海沿いに鍛冶工房を造ったほうがよっぽど便利である。その理由は、鍛冶技術の秘密を他の勢力から守るためにわざわざ山中に造ったのではなかろうか。当時、鍛冶技術は、大変高度な技術であった。また、原材料の鉄は、日本では生産されていなかった。そのため鉄の塊を大陸から輸入し、大陸の技術を用いて、安全な山中で加工したのである。更に、山上から海を一望できるため、他の勢力が攻めてきた場合はすぐに察知できることも理由に挙げられる。また、鍛冶という高度な技術力を有する人材がいたと考えると、以前から生活していた人ではなく、大陸から技術者が移住してきたのではないとも推測される。五斗長垣内遺跡の背後には、大和政権など、強大な勢力があったとの諸説がある。いったいそれは誰なのであろうか。そういうことを考えながら遺跡を眺めると、より遺跡が持つ意味の重みを感じることができる。

淡路島では、銅鐸などの青銅器も多く出土している。これも淡路島の特色であり、特に慶野松原の近辺で多く出土している。慶野松原近辺は、先進文化がいち早く入った場所なのかもしれない。弥生時代後、地域の有力者が力をつけ、周辺の村を支配し国をつくる。有力者が権力の象徴として大規模な古墳をつくるようになった時代を、古墳時代と呼ぶ。古墳時代に、淡路島の海人が活躍した。海人は、^{あま}心神天皇など、天皇が淡路島を訪れた4世紀から5世紀にかけて特に活躍した。日本書紀には「野島の^{あま}海人」が登場している。淡路市野島にある貴船神社遺

跡では、「野島の海人」が塩をつくった製塩跡が発掘された。現在の貴船神社遺跡では、「野島の海人」が塩づくりに励む姿が銅像で再現されている。是非、現地を訪れ、当時の風景を思い浮かべてもらいたい。

淡路島で有名な海人は、「野島の海人」と「御原の海人」である。「御原の海人」は、現在の三原平野から沼島周辺で活躍した海人だと推測できる。「御原の海人」の有力者のお墓が、伊比の沖合い約100mにある小さな島「沖の島」にある。沖の島古墳群と呼ばれ、10数基の古墳がある。舟の形をした石室があったり、鉄製の釣り針、ウキ、網の錘などが出土している。沖の島へは舟で渡るしかないが、淡路島の海岸から沖の島を望むと当時の風景を思い浮かべることができる。

また、岩屋の裏山に石寝屋古墳があり、古墳を少し登ると明石海峡が一望できる。沖の島古墳群や石寝屋古墳など、海に面した場所にある古墳に埋葬されている有力者は、当時の海人の親分ではないかと推測できる。

淡路島には、海人の有力者の古墳がある一方で、古墳の全体数が少ないことが特徴である。これほどの面積を有しながら、現在把握されている古墳の数は160基程度である。紀ノ川中流域に位置する「紀伊風土記の丘公園」にある小さな山に数百の古墳があることと比べると、島内にある古墳の数は非常に少ない。その理由は、古墳をつくるような有力者が現れる前に、大和政権が淡路島をおさえたからである。

旧三原町賀集八幡にある西山北古墳は、古墳内に入ることができその構造を確認できる。また、洲本市曲田山の裏にある曲田山古墳も古墳内に入ることができる。淡路市郡家にある郡家古墳も地域の有力者の古墳である。柳学園の校庭内には古墳があり、しかも復元されているのでいつでも見に行くことができる。洲本実業と柳学園の間にある山には古墳群があり、古墳が点在している。

国生み神話などの伝承地

淡路島の歴史的な景観の代表として、国生み神話の伝承地が挙げられる。島内に「オノコロ島」と伝えられている代表地は、淡路市岩屋の「絵島」、三原平野の「おのころ島神社のある丘陵地」、「沼島」などである。

「絵島」は、国生み神話の伝承が多く伝えられているだけでなく、枕草子や平家物語にも登場する。平家物語では、平家が月の夜に明石海峡を渡り、絵島から月を眺めたと書かれている。また、西行法師が「千鳥なく 絵島の浦に澄む月を 波にうつして見るこよいかな」と絵島を詠った歌も有名である。「絵島」は国生み神話の伝承地だけでなく、歴史的にも重要な景観である。

「おのころ島神社」が国生み神話の伝承地とされている理由は、大昔に三原平野が入り江になっており現在の丘陵地が島であったと推測されることと、丘陵地が平坦な三原平野に海に浮かぶ島のように見えたことが挙げられる。昔から神社があったわけではなく、松が鬱蒼としていた丘陵地であったようである。その松に、伊邪那岐と伊邪那美の靈魂が宿っていると考えられた。神社は、江戸時代に建てられた。現在、「おのころ島神社」が建っている丘陵地は、海に浮かぶ島のように見える景観は当時のままであるが、境内の景観は時代とともに変化している。

「沼島」は、上立神岩、下立神岩やおのころ島神社など、国生み神話を濃厚に継承していることを感じられる島である。

古代

淡路島は、古事記や日本書紀に頻繁に登場し、島内にはそれに関連した場所が多くある。例えば、古事記には安寧天皇の孫「和知都美命」が淡路島の御井宮におられたと記されている。また、日本書紀には、反正天皇が淡路島で生まれた際、近くに素晴らしい水が湧く井戸があり、その水を産湯につかたとされている。井戸があった場所として、旧三原町松帆の産宮神社境内の井戸、産宮神社脇に流れる倭文川を渡ったところにある井戸が挙げられる。反正天皇の生まれた宮は「淡路宮」とされているが、産宮神社と産湯をとったという井戸があるこの近辺が「淡路宮」ではないかと推測できる。

淡路島は、水不足に苦労した島ではある一方で、素晴らしい水が湧く島でもあった。古事記では、仁徳天皇が朝夕2度、淡路島から水を取り寄せたとある。天皇が口にする水は「聖水」であり、淡路島は「聖水」が湧く島だとされた。「聖水」は、現在の御井の清水であったのではないか。というのも、仁徳天皇は難波に都をおいたという記録があり、朝夕に淡路島から「聖水」を取り寄せたとすると淡路島の大坂湾に面した側で湧いていた水であると考えられるからだ。

淡路島へは、淳仁天皇と早良親王が流されてくる。淳仁天皇は、流された翌年に脱出を試みるが失敗し捕らえられ、その翌日に亡くなったとの記録がある。捕らえられた翌日に亡くなったのなら病死とは考えにくい。淡路島には殺されたのではないかとの説もある。現在、淳仁天皇陵は南あわじ市賀集にあるが、明治3年につくられたものだ。志筑から郡家へ行く途中の高島陵という墓地、三原平野に点在する淳仁天皇のお墓だとされる場所など、淳仁天皇のお墓はここだという説が島内各地にある。

万葉集で兵庫県下の風景を詠んだ歌は80首ほどあり、その内、18首が淡路島を題材にしている。しかしながら、淡路島に上陸し淡路島を詠った歌は1首もない。明石海峡を渡る際に、また、対岸から詠った歌ばかりである。万葉集によく詠われた場所というと、松帆の浦、野島、慶野、浅野の滝がある。

島内の源平の合戦の伝承地で、かつ、景観として興味深い場所といえば福良湾であろう。福良湾には、平敦盛にまつわる煙島がある。敦盛の首を刎ねた熊谷次郎直実が、自分の息子と同年代の敦盛を殺したことを悔いて、福良湾に集結していた平家のもとへ、敦盛の首を届けた。敦盛の父、平経盛は、その首を福良湾内の小さな島で火葬したところ、一筋の煙が空高く立ち上ったことから、煙島と名付けられた。福良湾から眺める煙島の景観は、歴史的な趣きがある。

社寺は、歴史的な景観として重要である。大和天国魂神社は、鬱蒼とした樹林のなかに建つ神社である。現在も「二宮」という愛称で地域に親しまれているだけでなく、鬱蒼とした樹林のなか、静かに立つ昔ながらの神社の景観を感じることができる。寺では、旧三原町八木の国分寺が有名である。国分寺の塔跡は、国史跡に指定されている。国分寺の近くから塔を葺いた瓦を焼いた窯跡も出土している。その他、古いお寺では、千光寺、東山寺や常隆寺などがある。常隆寺は常隆寺山上にあり、桓武天皇が建立した寺としても有名である。

成相寺は、是非一度訪れる値打ちのある寺だと思う。東大寺の南大門と中門のように、古い寺には門は2つあるのが一般的である。島内で大門が残っているのは、成相寺だけである。しかも、その大門が本堂よりも高い位置にあるため、大門から境内を望むとかつて成相寺が大きな寺であったことを感じられる。また、成相寺には室町時代につくられた伽藍絵図が残っている。伽藍絵図を模写したものが、旧三原町図書館入り口に展示してあり自由にみることができ

る。伽藍絵図を見た後に、成相寺を訪れるとなお一層趣きがある。成相寺は高野山からきた実弘上人がつくった寺であり、伽藍絵図は高野山とそっくりだ。

諭鶴羽山山頂にある諭鶴羽神社、かつては諭鶴羽権現といわれたように、修験道の神社として全国的に名を知られていた。鎌倉時代から室町時代にかけて、熊野信仰が入り非常に栄え、多くの建物が軒を連ねていた。歴史的な景観は、色々なことを思い浮かべながら眺めることが大切だと思う。

鎌倉～安土桃山時代

武士の時代になると、館や城が構えられるようになる。南あわじ市八木の養宜館跡は当時の守護大名が住んだ館である。養宜館跡は館を囲むように空堀が掘られ、その土を積んだ土塁が今も一部残っている。養宜館跡を訪れると、鎌倉、室町時代の武士の暮らしぶりを感じることができる。

戦国時代から安土桃山時代の代表的な建築物といえば、洲本城址である。石積みは当時のまま残っており国の史跡に指定されている。現在の天守閣は、昭和天皇の御大典記念に展望台と休憩所を兼ねて建てられたものであり、県景観形成重要建造物に指定されている。修復が必要な箇所も見受けられるが、国史跡内にあるため補修はなかなか難しいとの話を聞いている。明治維新の際に、全国にあった天守閣の多くが破壊された後、惜しいことをしたと鉄筋コンクリートなどで復元される例が各地にあるが、元の城址に天守閣を建てた最初の例が洲本城である。そういう面からも歴史的な建築物と考えてもいいのではないか。

江戸時代

江戸時代に入ると、現在の洲本市内に城下町が広がるが、現在のまちなみにはその面影はなく、古い建物はほとんど残されていない。洲本市内通町3丁目左海邸が唯一江戸時代の建物の面影を残しているくらいである。明治時代後半から、武家屋敷があった場所に鐘紡が紡績工場や社宅をつくったことでまちなみが変わった。また、淡路島の住民は「新物食い」なので、お金ができると家を建て直す風潮がある。そのため昔あった茅葺きや藁葺きの家は、ほとんど残っていない。現在の洲本市で江戸時代を感じさせるものといえば、道幅が細く迷路のような街路である。敵が簡単に城へ辿りつかないようにするために、そのような街路をつくった。寺町は昔ながらの景観を残している貴重なまちなみといえる。

江戸時代の淡路島の景観を考える際には、農村の民家が重要な要素となる。茅葺きか藁葺きの母屋の前に長屋門があり、その間に作業場となる坪庭があった。また、母屋の側には離れ、小屋、トイレ、お風呂などが設けられた。屋敷の周りは、バベ（ウバメガシ）でつくったカッベキか土堀で囲まれており、季節風をさけるため敷地内に防風林を植えた家もあった。農村地域で瓦葺きが主流になったのは明治時代以降である。このような家がある農村地域は、江戸時代からつづく重要な景観であるといえる。

江戸時代後半になると、淡路島では、軍事的に重要な場所として松帆と由良に台場がつくられた。松帆の浦には台場跡が残っているが、昔ながらの白砂青松の美しい景観はなくなってしまった。また、松帆の浦では、内陸を掘って港をつくった跡が出土しており、「松帆湊」として国史跡に指定されている。江戸時代には、由良の成山から生石にかけても台場がつくられ、その台場は明治時代に近代化され砲台が設置された。現在、砲台跡を遊歩道として一体的に整備

されている。遊歩道から眺める成ヶ島、友ヶ島、対岸の紀州の景観は抜群である。

明治以降

明治時代以降、淡路島でも西洋風の建築が建てられた。旧三原郡役所は、淡路島の近代化の面影を感じることができる。旧三原郡役所は、国道 28 号青木の交差点脇にあった。旧役所の建物は老朽化が進み取り壊すとの話が出た際に、なんとか保存してもらえないものかと地方史研究会でお願いにあがった。一度は、保存は困難であると取り壊すことに決まったが、神戸大学の建築関係の教授が注目してくれたり、建築士会が保存に向けて取り組んでくれたおかげで、兵庫県教育委員会で解体したものを保管するということになった。その後、何の動きもなかったので再建を諦めていたが、現在は、ファームパーク内に旧三原郡役所が再建されている。旧三原郡役所は、県下に残っている旧役所の建築物で最も古いものではないか。

鐘紡工場跡地も淡路島の近代化を感じさせる建物である。現在は、図書館や飲食スペースなどに再利用されており、大変興味深い。

私が残すべきだと感じている建築物は、^{こうだいけ}上田池堰堤である。^{こうだいけ}上田池の堰堤が昭和 7 年に竣工されるまで、三原平野の農村は大変水に苦しんだ。当時の最新の技術を駆使してつくられた堰堤は、三原平野の水不足の歴史を解消したという点からも大切にしていきたい。

(3) 淡路島らしい景観

淡路島は、山が海岸と海に迫っている。このような山と海が溶け合った風景が最も淡路島らしい景観であると思う。しかしながら、海岸の景観も私が小さいときから大きく変わってしまった。かつては白砂青松、紺碧の海と謡われた景観が島全体で見受けられたが、慶野松原や大浜海岸を残し残念ながらその景観は失われてしまった。しかし、淡路島から眺める明石海峡、鳴門海峡、紀淡海峡の景観は今も素晴らしい。

諭鶴羽山頂に「八州台」がある。山頂から八つの国(州)を眺めることができたということで「八州台」と呼ばれたが、現在は周辺の樹木が徒長し眺望を遮ってしまっている。また、古茂江海岸には、四つの国(州)を望むことができる旅館「四州園」があった。「四州園」からは、播磨、摂津、阿波、紀伊を眺めることができ、非常に素晴らしい景観であったとのことである。

(4) 歴史的景観、淡路島らしい景観の活用

まず、島内に点在する歴史的な景観を巡るコースを設定し、線で結ぶ取り組みが大切である。その取り組みを効率よく広げていくためにも、コースを紹介する冊子を作成すべきだ。先日、三田市で開催された地域文化に関するシンポジウムに出席した。ボランティアの方に地域を案内していただいた際に、地域の歴史や特徴について上手にとりまとめた冊子が使われており、非常に参考になった。淡路島内の移動手段も、マイクロバスから徒歩まで多様なので、移動手段に合わせたコース設定と冊子の作成が必要である。

次に、ゾーンとして景観に配慮すべき地域を決めて、住民と一緒に景観を守り育てていく取り組みを進めてはどうか。例えば、成相寺近辺には古い景観が多く残っている。成相川の谷の手前には、室町時代に栄えた安国寺跡がある。湊谷は蛸で有名で、更に進むと成相寺が現れる。また、ため池や古い民家も残っている。県自然環境保全地域に指定されており、2月には村上さん宅のしだれ梅を見に多くの方が訪れる。成相寺を中心とした南あわじ市八木馬回を景観を守り育てる

ゾーンに指定し、住民の理解と協力を得ながら景観づくりを進めてはどうか。

また、八木から榎列^{えなみ}近辺の三原平野東部は、古い民家やたまねぎ小屋、養宜^{やぎ}館跡、国分寺など、淡路島を代表する農村景観を良く残している。平野の景観のモデルとして、三原平野東部を景観を守り育てていくゾーンに設定してはどうだろうか。

景観づくりは、淡路島景観フォトコンテストの開催など、現在、行政を中心に積極的に取り組んでいただいている。しかし、行政まかせではよくないと思うので、住民、地域の活動団体、各市、県民局が結束して淡路島らしい景観を守り育て、活用していくような取り組みを進めていくべきだと思う。